

夢から覚めるとき

建月 創始

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

浦の星女学院に通う、2年生、渡辺曜は同級生で幼馴染である高海千歌に勉強会をきっかけに告白しようと思ったは良いものの、想いを口に出すことが出来ずあえなく失敗。

そして彼女は目の前で寝息を立てている千歌に、意味がないとわかりながらも想いを伝えようとする、しかし、「千歌ちゃんのことか」から先が言えず、告白は失敗する。

そして、曜は自分に「大嫌い」と口に出す。

この一言が原因で少しずつ仲のいい幼馴染の歯車はズレていく。

※シリアス描写あります、ご注意ください。

全5話以内に終わる予定です

目次

# 1	親友の夢	1
# 2	どうすれば	11
# 3	勘違いが解けるとき	21

1 親友の夢

「千歌ちゃん……私ね、千歌ちゃんのことを……」
好きなんだ。

——そこまで口に出したところで最後の一言が喉に詰まって出ない。

今、教室の机に突っ伏して寝息を立てている状態の彼女にすら私は本心を伝えられない、そんな私が私は……。

「大嫌い」

つい自分に対する言葉が口から飛び出し、教室という狭い空間のどこかへ反響するごとく消えていく。

思いを伝えられない悔しさと彼女に対する愛しきで胸が一杯になる。

辛い、目の前に愛おしい人が居るのに手を伸ばせない自分に不甲斐なさを感じ、嫌悪感を覚える。

すぐ近くに居るのに……何故か心の距離は果てしなく……遠い。

「おはヨーシコー……」

「おはよ……じゃなくてヨハネよ！」

「は……は……」

いつも通りバスに乗り込み善子ちゃんと一緒に学校へ向かう。

バスの揺れ、海風と潮の香り、チラチラと見え隠れしている善子ちゃんの墮天使グッズ……全ていつも通りだ、しかし、何故だろうか、今日は胸騒ぎがする。

なんかこう……胸の奥がざわめくような、そんな感覚。

「浦の星女学院前……浦の星女学院前」

そうこうしているうちにバスは私達を浦の星近くの停留所へと送り届ける。

善子ちゃんと一緒にバスを降り、二人で他愛ない話をしながら坂を登る。

そして、そこを登っている途中、見覚えのある、二人の後ろ姿を見つける。

一人は少し深い赤毛のロングヘアの女の子、そしてもう一人は明るい橙色の髪のに頭のとっぺんらへんからびよこ、と一本クセ毛が立っている女の子。

誰とは言わずもがな梨子ちゃんと千歌ちゃんである。

その後ろ姿を見つけると共に私は二人に向かって駆け出す。

「おっはヨーソロー！二人共！」

唐突に後ろから投げかけられた挨拶だが、いつものことで慣れすぎてしまった梨子ちゃんはビクともせず挨拶を返す、しかし、千歌ちゃんはびっくりする……はずだった

のだが、今日はなぜか反応が鈍い。

そして、ワントンポ置いたあとに、「おはよう、よーちゃん」と返事をする。

ほんの少し、元気がない……？

「……………」

と、少し変に思いながらも私は二人と歩き始める。

……後ろから走ってくる善子ちゃんを忘れて。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよおおおお!!」

「……」
「ここがこうだからこの公式を代入して……ほら、出来上がり!」

「あ、うん、ありがと、よーちゃん」

「これぐらい、お安い御用であります!」

このように私は千歌ちゃんに時々勉強を教える、この時間が私にとってどんな時間よりも大切な時間だ。

なんてって、二人きりでなんの邪魔なく、千歌ちゃんの横に座れるのだから、昨日だって、今日のように勉強を教えていた……まあ最終的に寝ちやつて、私の想いを伝えることは出来なかつただけだ。

だけど……やつぱり今日の千歌ちゃんは変だ、なんだろう、どこかショックを受けて

いるというか……。

はっ！まさかなにか大きな悩み事!?それなら好きな人のため!この渡辺曜、一肌脱ぐであります!思い立ったら即行動!

「千歌ちゃん……なんか元気がないね、なにかあった?」

私がそう千歌ちゃんに言うと、千歌ちゃんは少しビクツと体を震わせたあと、にへら、と笑いながら首を横に振る。

「な、なにもないよ、気にしないで!ほら、練習……行こ?!早く行かないとダイヤさんにまた怒られちゃう!」

千歌ちゃんはなぜかその話題を誤魔化すかのように慌てて部室へ向かう支度を始める。

そこで私は長年の千歌ちゃんとの付き合いから一つの答えを見出した。

「嘘……だよね?それ」

千歌ちゃんは私のその言葉を聞いて、ぎよ、としたような表情を浮かべ、もう一度にへら、と笑い「なんでもないよ」と呟く。

なんでもないわけがない、そう思った私は千歌ちゃんに言う。

「嘘だよ、千歌ちゃん、嘘下手だからわかるもん、ねえ話して?」

「なんでもないよ」

「なんでもなくない」

「なんでもないって……」

「なんでもなく……」

「なんでもない!!!」

千歌ちゃんが私の言葉を遮るように激しく声を張り上げ、否定する。

千歌ちゃんの目を涙が覆い、今にもこぼれ落ちてしまいそうだ。

私とその怒涛の剣幕に一瞬後退りしそうになったとき、千歌ちゃんは私に向かってこう叫ぶように告げた。

「私がこんなになってるのは全部!!!」
「曜ちゃんのせいなのに!!!」

その言葉を残し、千歌ちゃんは教室を去って行ってしまった。

私は教室に一人、静かに佇むことしか出来なかった。

「部活……休んじやつたな」

私は一人でバスに揺られながらそう呟く。

乗客は誰もいない、居るのはバスの運転手さんだけ、どうせ独り言を呟いたところで、聞こえはしない。

『曜ちゃんのせいなのに!!!』

その言葉が私の鼓膜を常に震わしているように脳裏から離れてくれない、声色だけではない、その時の教室に差し込むオレンジ色、千歌ちゃんの涙が溢れそうになっている、赤い二つの大きな瞳、その全てがもう脳にインプットされてしまっているようだ。

「悪いこと……しちやつたな……明日、謝らない……と……」

そこで私の視界は瞼によって遮られてしまった。

気がつくと私は暗闇に居た。

その場所は何も見えず、何も見させてはくれない。

しかし、声が聞こえる、それは、ライブで歌うときのようにエコーがかかっているように、うで何重にも重なって聞こえる。

まず最初に

「全部……わたしのせい」

という言葉が私の声で暗い空間に響く。

その言葉が続けて、私の声を加工したような声でこう聞こえる。

「そう、私のせい」

「そう、あなたが悪いのよ」

「そう、全部全部曜が悪い」

その言葉が繰り返されるたびに心が雑巾のように絞られていくような感覚を覚える。息苦しい、助けて、ねえ助けてよ、誰か、誰か……。

私はそう呟くが私の声は響くことなく虚空へ消え失せていく、まるで私に発言する権利がないかのように。

「わたしのせい、わたしのせい、わたしのせい」

「あなたが悪い、あなたが悪い、あなたが悪い」

「曜が悪い、曜が悪い、曜が悪い」

どんなに耳を塞ごうとも、鳴り止まない耳鳴りのように耳にへばりつき、声は離れてはくれない。

うるさい、うるさい、うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいウルサイ。

どれだけその言葉を呟こうとも声はやはり虚空へと消えていく。

響くのは加工された私の声だけ。

そんな状況のこの暗闇に一筋の光が指した。

それに気づいた私はその光の指す一点をあふれる涙を拭き、じつと見つめる。居た。

橙色の髪に脳天前からはねた一本の髪が特徴の少女、そう、高海千歌がそこに居た。

私はそれを確認すると、一直線にそこへ駆け出す、藁にもすがる思いで駆け出す。

そして、肩を持ち、抱き寄せる、そうすれば幾分か楽になるような気がした、という
か楽になった。

すると腕の中に居る千歌ちゃんがいつもの陽気な声で私に言う、エコーはかかっている
ない。

「だめだよ、よーちゃん」

「え？」

私はその言葉を聞いて顔を見ようと、曲げている肘を伸ばす。

しかし、そこには、千歌ちゃんの顔はなく……正確には口以外の場所が黒く塗りつぶ
された高海千歌の顔があった。

その様子の千歌ちゃん（らしきもの）に私は驚き、突き飛ばし、すぐに逃げようと踵
を返そうとする……が、私は地面にへたりこみ、動けなくなってしまう。

まさか、腰が抜けた!?

そうすぐさま判断するも遅かった、もうすぐ目の前に“それ”が迫っており、もう逃
げられない状態だった。

そして、“それ”は私の肩を掴むと、次はしつかりエコーのかかったどこか甘い声で
こう言った。

「だめだよ、よーちゃん、これも全部」

そこで、すべての声が消え、静寂が訪れる、しかし、*“それ”*は口を動かし続ける。声は聞こえない、しかし、私には*“それ”*の言った言葉が完全に理解できてしまった。「曜ちゃんのせいなのに」

あ。

そこで私の中でなにかがブチリ、と千切れる音がして、その暗闇はガラスが割れるように砕け散った。

「っは?!?!」

目を覚ますとそこはバスの中で、窓からはオレンジ色の光が射し込んでいる。

私が目を覚ましたのを確認するとバスの運転手が私に向かって、こう言う。

「渡辺さん、ここ降りるところでしょ?早く降りなさい」

「あ、はい!」

そこで私は飛び起きるように立ち上がり、バスを降りた。

体がダルい、なんだろう、とても悪い夢を見たような気がする、ああ……。

「明日、学校行きたくないなあ」

寝る前と起きた後の考えが変わっていることに私は気づくことなく家に着いてしまった。

夢を見た、見た覚えなどないのに展開をすべて覚えてしまっている夢。

そして最後はいつも。

「曜ちゃんのせいなのに」

という言葉で終わる、そんな夢。

目覚めると記憶から消えるようになっていたその夢は今ではもう全てを鮮明に思い出せるようになってしまった夢。

その夢を見るようになってから。

私は部屋から出れていない。

#2 どうすれば

最初はただ、ただ少し疲れが溜まっているようで学校を休んだだけだった。

でもその疲れは「あの夢」を見るたび日に日に増えていき、私の体を苦しめ、ついには私の体を部屋に縛り付けるほどになってしまった。

……いや、それはきつと違うのだろう、私は恐れているのだ、これから先のことを。

これまで築き上げてきた千歌ちゃんとの関係が壊れるかもしれない、ということ。

それだけではない、千歌ちゃんを不快にさせてしまった、という罪悪感が私に疲れがあるような感覚を覚えさせているんだろう。

それを心のどこかで理解しているからこそ、私は外に出ることを拒んでしまっている。

それに私がもし外に出たとして、何になるというんだ、千歌ちゃんを傷つけてしまった私なんか。

「よーちゃん……今日も休み……だね」

「そうだね……どうしたんだろ」

私はそんな会話をもう何日も梨子ちゃんと繰り返している。

曜ちゃんが学校に来ない理由はきつと私のせいだ、私があの日、あんな言い方したから……でも曜ちゃんも曜ちゃんだよ、なんで……あんなこと、急に。

それは、曜ちゃんと喧嘩してしまった日の前日の話。

「よーちゃん、ここどうすればいい？」

「ん？どれどれ……あ、ここはね」

曜ちゃんが横から細かく教えてくれる、とてもわかりやすく、先生の授業より何倍も楽しい。

……それに曜ちゃんと二人きりで勉強なんて、一人で過ごしてた中学時代じゃ考えられないから、嬉しい。

そしてだいぶ課題が終わり、一段落、というとき、曜ちゃんが口を開いた。

「ち、千歌ちゃん！」

「ん？なあに？よーちゃん」

「わ、私ね！ずっと前から、ち、千歌ちゃんのことを……」

そこまで言ったところで曜ちゃんは急に固まり、それから先の言葉は聞けない。

なんだろう、と思いながら、子首を傾げる。

曜ちゃんの顔は熱があるのか耳まで真っ赤だ。

そして、数秒経たないうちに曜ちゃんは「や、やっぱり、な、なんでもないよ！気にしないで！」と言う。

なんだろう……気になるな〜

そう思いながら曜ちゃんと駄弁っていると、今日は練習が休みなため、気が抜けているのか、眠気が私を襲い始める。

「ふあ〜、眠くなつてき……ちや……」

「え、ちよ?!千歌ちゃん!?!はや」

曜ちゃんの言葉をすべて聞くことなく私は眠りに落ちた。

ずっと、目を覚まし、上体を起こそうとしたとき、曜ちゃんの声が聞こえ、条件反射で、その動きを止める。

「千歌ちゃん……私ね、千歌ちゃんのことを……」

曜ちゃんのどこか寂しげで、凛々しい声が私の耳に届く。

しかし、それから先はまただんまりで何を言いたいのかわからない。

なあに?よーちゃん、と今、体を起こして聞き返したい、でも、なぜか体が強張って起こすことができない。

今、体を起こすとなにか起こる気がして……

「大嫌い」

え。

考え事をして数秒が経った頃だろうか、そんな言葉が曜ちゃんの口から放たれた。

その声色は冷たく冷ややかでナイフのように鋭かった。

そして、その鋭い言葉は私の心に音も立てずに突き刺さる。

うそ……だよな？ よーちゃん……？

心臓が早鐘を打ち、言うことを聞いてくれない、体から冷や汗が流れるのを感じる。

胸の内がきゆう……と締まっていくのを感じる。

この心臓が治まるまで……少し寝たフリをしておこう。

治まってから、曜ちゃんと一緒に帰ろう……でもなんで嫌いなのに一緒に帰ってくれ

るんだろう、なんで？ なんで？

そして、数分狸寝入りをして私は起きるフリをして、待つてくれていた曜ちゃんと一

緒に家へと帰った。

その曜ちゃんの顔と声はいつも通りの元気な顔で……だから、帰り道、頭の中は「なんで？」でいっぱい……もう何がなんだかわからなくて……

夜はまともに寝れたもんじゃなかった。

それで、次の日、真意を聞くのが怖くて、心配してくれた曜ちゃんの全部せいにして逃げて……

そんな不甲斐ない自分にイライラする。

「よーちゃん……会いたいよ」

その言葉は誰にも届くことはないほどの大ききで口を飛び出す。

もちろん、私などに注目している人間など誰もいないため、誰にも届かない。

でも、心の何処かで誰かに届いてほしい。

私はそう願ったのかもしれない。

夢を見た、同じ夢を、見た。

どれだけ引き剥がそうとしても引き剥がせない夢。

逃げようとしても何度も追ってくる声、音、そして影。

千歌ちゃんらしき「モノ」、それを私は影と呼ぶことにした。

影はどれだけ早く走ろうと、振り返るとすぐそこにいて、私の肩を掴む、何度振り払おうと何度も私の肩を掴み、言うのだ「曜ちゃんのせいなのに」と。

夢で何度も謝った、何度も泣いた、何度も自分を責めた、それでも、結果は変わらな

い、最後にあの一言を言われていつも目が覚める。

その夢のせいかな最近では寝不足で鏡を覗くとそこには目の下に太い隈を作った私が居た。

それだけではない、髪はボサボサ、微妙に頬は痩せこけ、腕や足は不健康そうに細くなり、肌なんて荒れ過ぎていて酷いものだ。

こんな女がスクールアイドルの一員だなんて笑わせてくれる。

こんなの……こんなの……。

そう思うと涙が溢れ、止まらなくなる。

その涙が溢れるように、疑問が一緒に溢れ出す。

「私、何やってるんだろう」

「A q o u r s のみんなは今どうしてるんだろう」

「私はなぜ逃げてるんだろう」

そんな疑問やその他の多くの疑問が溢れ出す。

しかし、私はその疑問に対する答えを見つけない、もう諦めているのだ。どうせ私のことだ、一人で動いても何も打開することなど出来ない。

「はあ……私……どうすれば」

そう言う私はおでこを膝の上にコツンと乗せ、目を閉じた。

夢を見た、それは、輝いた世界の夢、今までの悪夢とは全く持つて違う夢。

私達……Aqoursの輝きの夢。

眩しい、目眩がしそうだ。

それぐらい眩しい、でも、その夢のAqoursには私という存在自体が抜け落ちて
いる。

なんだろう……寂しい、私だけ取り残されてる。

手を伸ばしたい、この輝きに手を伸ばさなきゃいけない。

私も輝きたい。

そう思ったとき一気に景色は変わり、いつしか見た電車の中の光景になる。

私が座っている反対側の座席に影が居た、でも、口から上の表情が見えない所は変わ
らないが、姿形が私になっている。

これは、私自身の影だろう。

そう、容易に想像ができた。

そして、その影が私に問いかける。

「悔しくないの？私……悔しくないの？」

それは、あの日私が千歌ちゃんに問いかけた言葉、その言葉に千歌ちゃんは内心悔し

いののに、みんなで全力で頑張ったのだから悔しくない、と答えたのを私はよく覚えてい
る。

これに対する答えを私は持ち合わせている、だから、私は口に出す。

「悔しいよ、私はなんでこんな弱いのか、どうしてこんなに不甲斐ないのか、そして、
何も動くことができないのか、きつと怖いからだよね、私は恐れているんだと思う、で
も、それにずっと怯えているから、私は前に進めない、そんな自分の弱さが悔しい、だ
から、打開するんだ、自分一人で、私自身の力で」

私は影に向かってそう答える。

すると影は私の笑い方でニコツとしたあとこう言う。

「もう、バカ曜だなあ全く……私は一人じゃない、そうでしょ？」

あ。

そうか……そう……だったな、私はほんとにバカだ、バカで単細胞なのに一人じゃ何
も出来ないバカ曜じゃないか。

そう思った瞬間、電車の中にA q o u r sのみんなが居て、みんなが私に向けて笑い
かけているのがわかった。

そうか、一人で引きこもっても意味なんかないんだ、まずはアクションを起こさな
いと、千歌ちゃんに謝らないと。

一度に全部解決する必要なんてない、不安は一つずつ消してしまえばいいんだ。

「わかった？ 私、さあ次は目を覚まされるんじゃない夢から自分で目覚める番だよ、打ち勝とう、そして、千歌ちゃんに想いを伝えるんだ」

「うん！」

そう返答した瞬間、世界は遮光カーテンに包まれたかのように暗くなる。

しかし、怖くはない、これは私の心の中、それなら全部受け止められるはずなんだ、そして、この闇をすべて私は受け止め、自分の手で目を覚ますんだ、そして……そして私は……千歌ちゃんに謝って、それで……想いを伝えるんだ。

あの声が響く、何度も聞いて聞き飽きた声ではあるが、全て静かに聞き、拒絶はせず、受け入れる。

そう……全て私なんだ、だから全部受け止めて心に刻もう。

全部私のせい、そうさ、だから、謝るんだ。

そうすると声は止み、何も聞こえなくなる。

さあ次だ。

次出てくるのはきつと千歌ちゃんの影だ。

これも私の心の歪み、だから抱きしめる、最初の縋り付くような抱擁ではなく、優しく、包むように。

そして、ちよつとした、予行演習をするのだ。

相変わらず声は響かないが、私は影にこう伝える。

「千歌ちゃん、ごめんね、しつこくて、本当にあのときは心配で……それで……それで……それで……」

そこで、涙が瞳を覆い、視界がぼやける、そして、過呼吸のようになり、声が出しにくくなる、そんな状態でも、伝えなきや。

私は呼吸を整えて息をしつかり吸い、こう続ける。

「罪悪感で千歌ちゃんから逃げた私を許してください、また、私と仲良くしてくれますか」

そう言葉にした私に向けて影は少し満足げに笑うと私の中に消えていった。

「さあ、目覚めのときだよ、おはよう！キラキラな世界！」

そう言うとき真っ黒な空は白く晴れ、上から射し込んだ光が優しく私を包みこんでいく。

その時初めて私は夢から覚める瞬間というものを味わった。

#3 勘違いが解けるとき

決めたら即行動……と思ったは良いものの……まずは動けるようにならなきゃ。

私は自分のやせ細った足を見つめそう思う。

こんな足ではあの坂を駆け上がるなど出来はしないだろう。

とりあえず帰りは歩いて、行きは親に送ってもらうことにして学校に行こう。

私は浦女の制服に身を包む、そしてもう一度鏡の前に立って自分が痩せたことを実感する。

もちろんその姿は綺麗で健康な姿とは言えない。

よく見たら目の下のクマなんて酷いものだ、黒くなっているうえに少しシワが寄っている。

「はあ……」

そんな姿の自分に私は肩を落とす。

こんな状態で学校に行っても良いんだろうか……？

唐突にその考えが私の中に走る。

……そんなこと今考えても意味はないだろう、何事もやってみなければわからないの

だから、千歌ちゃんと一緒にA q o u r sを作ったときのようになら。

「……ツーよし!!」

私は勢いよく部屋のドアを開け、部屋から一步踏み出す。

その普通の廊下ですら私にはとても光り輝くステージのように見えた。

「今日はよーちゃん来るかな……?」

私はそう呟き家を出る、その呟きに外で聞いていた梨子ちゃんが私に笑顔で問いかける。

「そんな千歌ちゃんに朗報ですーこちらをご覧ください」

そう言い私にスマホの画面を突きつける。

どうやらメールのようだ。

「え……と、『今日、学校行きます、敬礼』……差出人は……よーちゃん!」

私は驚いて梨子ちゃんのスマホを落としそうになりながらもなんとかキャッチする。

そんなことよりだ、私は梨子ちゃんを聞いたはず。

「り、梨子ちゃん!?!、これーこれ本当? 本当?!」

その私の怒涛とも言える剣幕に梨子ちゃんは少し仰け反りながら私の問いに答える。

「まあ……本人から来てるし本当じゃないかな……? つていうかそつちにも届いてない

?メッセージ」

「あ、そういうえば届いてたかも……朝急いでて確認してないんだよね、えへへ」
私は自分の携帯を確認する。

あった。

放課後教室に残っていて欲しい、と書いてある。

その言葉を見た瞬間嬉しさが溢れ、飛び上がりそうなくらい、気分が高揚する。
しかし、それとともにあの日の記憶が突如として湧き上がる。

「千歌ちゃんのことか」

「大嫌い」

十数秒の間を分けて曜ちゃんの口から飛び出たその言葉。

表面には出てきては無いが、ずっと心の中では気になり続けてることだ。

「今日勉強会しなきゃ……ッ」

そう私は自分に言い聞かせるように静かに呟き、学校への歩を進めた。

教室のドアが開け放たれる。

そして、そのドアを開けたみかん色の髪色の娘が私に向かって一直線に駆けてくる。

「よーちゃん!!!」

その声は明るくて、どこか安心したような声色で。そして、私は静かに目を閉じる。

瞬間、私の頬は強い衝撃に見舞われる。

力強いビンタ、それが、一発私の頬を叩いたのだ。

教室が急に静かになるのを肌で感じる。

そして、その空気を感じた後、私は柔らかい体に包まれる。

抱きしめている細くしなやかな腕は小さく震えているが、力強く私の体を縛っている。

もうずっと離さない、と伝えるかのように。

「……………」

静かに絞り出すように彼女の口から発せられたその言葉、その言葉は言を重ねていくに連れて大きくなり、言葉の全貌が明らかになっていく。

「心……………だった……………心配だった……………心配だった!!!」

そう強く言ったあと彼女が顔を上げる、その顔はもう涙でぐちゃぐちゃで、鼻水も出てきそうでお世辞にも綺麗とは言えない顔だったけれど、私にとってはとても綺麗な顔に見えた。

そして私は千歌ちゃんに向けて口を開く。

「ごめんね、千歌ちゃん、心配かけて……ごめんね……」

決して許されたわけではない、しかし、許されたような、そんな気がしたのだ。そう思うと私の視界はぼやけ、頬を一滴の涙が滑り落ちる、それでは止まらず、いくつもの粒が落ちると次は一途の川のようになって流れる。

そして、我慢できず、私も千歌ちゃんの体を抱きしめる、強く、強く。

しかし、その状況は儂く、一つのチャイムにより壊される。

こればかりはしょうがない、ここは規則がある学校なのだから。

そして、私は離れる千歌ちゃんに耳打ちで伝える。

「放課後……勉強会しようね」

「……うんー」

彼女は私の問いかけに笑顔で答えた。

放課後、静かな教室にその二人は向かい合って座っている、今日は曜が教えてもらっている、しょうがない、長く休んでいるのに勉強がわかるほど曜も完璧超人ではない。

まあ……千歌が間違えたところを指摘出来るぐらいには曜の方が優れているのだが、

そこは内緒だ。

「あ〜！今日の分は終わり!!疲れたあ!!」

「流石に疲れたね、千歌ちゃん」

二人は大きく背伸びをする。

背伸びが終わると同時に曜が立ち上がり、頭を下げ、謝罪する。

「ごめんね、千歌ちゃん！千歌ちゃんを勝手に不安にさせて、勝手に居なくなつて……ごめん……ごめんなさい!!」

唐突な曜の謝罪に千歌は困惑し、それに釣られて千歌も謝罪する。

「ち、千歌もごめんなさい!!あんなこと言つて……でもあのときはあの一言のことで頭が一杯で、それしか考えられなくて……それで……あんなこと言つちやつた……」

「……?あの一言?なにそれ……?」

「え、あ、うん、よーちゃんが居なくなる2日前、勉強会、やつたでしょ?そこで私が寝てたらよーちゃんがなんか言つて……それを聞いてたら、よーちゃんが千歌のこと嫌いつて……」

そう言つて千歌は視線を机に向ける。

その千歌の言葉に曜は酷く自分の言動を責める。

本当に全部私のせいじゃないか。

はゝ本当にバカ曜だ。

「千歌ちゃん……本ツツツ当にごめん、ほんとに全部私のせいだ……ごめん……私が千

歌ちゃんのことを嫌いになることなんて絶対に無いよ」

「じゃあなんであんなこと言ったの」

千歌のジト目付きの指摘が真っ直ぐに飛んでくる。

その指摘に曜はどもる。

どうしよう、このまま勢いで告白してしまおうか、いや無理だ、どうせ詰まるに決まってる。

いや、でもやるしかないこの負の連鎖を断ち切るために言うしかない、よし……言うぞ……渡辺曜……気合入れろ……。

「それは……」

「それは？」

やっぱりどもる。

しかし、曜も覚悟を決めた身、これはもう言うしかないのだ、伝える以外ないのだ。

「ち、千歌ちゃんに」

「私に？」

「その……えつと……」

自分の顔が一気に紅潮していくのが伝わってくる、暑い、これは、ヤバイ。

千歌の顔が曜にどんどん近づいて行く。

近づくに連れて曜の顔が真っ赤になっていく。

「わ、私、わ、渡辺曜は……」

「よーちゃんは？」

フツ、とそこで曜の頭は妙に冷静になる、そして、覚悟を決めた顔で、こう伝える。

「私は千歌ちゃんのことを好きで好きで好きで好きで堪らないんです、でも、その想いを伝えられない私のことが嫌いで、大嫌いで、その嫌いが口に出て……」

そこまで言った所で千歌の顔を今一度見つめる。

その顔は真っ赤だった。

「ち、千歌……ちゃん？」

「よ、よよよよよよよ、よーちゃん!!つつつつつ、つまり?」

「全部私のせいです……」

「そこじゃない!!千歌が聞きたいのは!!よーちゃんは千歌のことをどう思ってるか!!」

「ツ!!私は……」

そこで曜は真っ直ぐ千歌に向き直りこう答える。

「私は……渡辺曜は……千歌ちゃんのことを大好きです、気持ち悪いかもだけど出来るなら付き合っただけ欲しいです!!」

そう言っただけで頭を下げ、チラッと顔を覗く。

覗いた千歌の顔はとても涙で濡れていて、それでいて笑っていて。

いわゆる嬉し泣き、という形の表情をしていた。

「よーちゃん……嬉しい……千歌も、よーちゃんのことが好きです！大好きです!!」

そう言うと千歌は曜の胸に飛び込む。

そして、それを曜は抱き返す。

お互いに強く、苦しいほどに。

苦しくてもその腕を緩めることはしない、いや、出来ない、二人はこの幸せを離すまい、と、もう二度と離れたりはしない、そう、伝えるようにお互いに抱きしめあう。

そして、千歌が静かに曜に伝える。

「よーちゃん、キスして?」

「えっ!?!」

「うーそ♡えいつ!」

千歌は曜の唇にその柔らかい唇を重ねる、曜は唐突の展開に少し身を震わせたが、すぐに目の前の彼女に想いを馳せるように、もう一度、抱きしめ、唇の重なりに身を任せた。

どうやら、この勘違いは私にとってはとても幸せな勘違いだったのかもしれない、あの悩みに押し潰されそうな夢を見た日々もこの幸せを手にするための少しの試練だった。

たのかもしれない。

もしかしたら、この今の一瞬も夢なのかもしれない、でも、もしそれでも、この夢から覚めても、私はきつとこの夢を忘れないでしょう。

もちろん、この夢が覚めるときなど訪れることはなかった。